# 人間万歩千里が

青島幸男

パロディー社

# 人間万事塞翁が丙午

著　者　　青島　幸男

発　行　　1995年３月30日　初版発行
　　1995年４月20日　第２刷発行
発行者　　青島美幸
発行所　　株式会社　パロディー社
　　東京都中野区中野5-52-15-1015
　　TEL. 03-3386-9855

編集／製本／印刷　　株式会社　飛　来　社
　　協　　力　　原田力男

# 人間萬事塞翁が丙午

青島幸男

# 目次

昭和十二年秋　5
待人来タラズ　67
勝利ノ日マデ　125
1949・夏　185
おしまいチャンチャン　241

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装丁　原田力男

# 昭和十二年秋

## 一

それは支那事変の始まった年の秋のことだった。いつものように親父橋の停留所で、ハナは青バスを降りて、蓬莱屋の先の角を曲った時、あやうく自転車に乗った子供にぶつかりそうになった。もう、あたりはすっかり暗くなっていて無灯火の自転車乗りは無謀に思えた。

「あーっ、おばさん」

ハナは、坊ちゃん刈りのその子供に見憶えがあった。たしか洋服屋の……とうかがいかけると、

「おじさんに召集令状が来たってよ」

と投げつけるように言った。

エッと絶句して立ちつくし、あわてて確かめようとしたが、子供はすでに体勢を立て直して走

り去っていた。
ハナは、その子供の背中に疫病神の姿を見たような気がした。体中から血の気が去り、膝頭から力がぬけて、ガクガクと音でも立てているようにふるえるのがわかった。「そんな馬鹿な、何かの間違いだ、あの子は誰かと見違えたにちがいない、そうでありますように」と心の中で祈りつつ足をふみしめながら前のめりに家へ急ぐ。
弁菊のたたずまいは何時もとちっとも変っていなかった。東京は日本橋堀留町、呉服問屋が軒をつらねる中に、御影石の砕片をふきつけたモルタル作りの二階建て、上も下も窓ばかりが目立つこけおどしの角店で、下が調理場、二階が住まいとなっている。店内はあかあかと電灯がともり、ガチン、ガチンと井戸のポンプが音を立て、その日の洗いものと明日の仕込みで若い衆がいそがしげに立ち働いていた。
ハナはおそるおそる正面の入口に近づいて様子をうかがい、脇へまわって通用口から入って行った。うす汚れた白衣に向う鉢巻、飯釜の水加減を見ていたらしいメシ炊きのクニさんがハナを一瞥して、けだるげに、
「おかえり」
と声をかけてきた。ハナはそれとなく板場を見まわしたが、鼻唄まじりで野菜をきざむもの、山のように積み上げられた弁当箱にかこまれて、汗まみれでタワシをせっせと動かしているもの、

神妙な顔で魚に鉄串を打っている板前――、何時もと特別変った雰囲気も見当らず、「ただいま」と、クニさんに答えたが、あの事を確かめるのもためらわれ、そのまま、二階へ上ってしまった。

茶の間へ行ってみると、ふだんなら、錦紗の羽織に竹割り縞のお召しの着物を着て、ピンと背筋をのばして長火鉢の前に、はすっかいに坐り、居丈高に頑張っているはずのおばあちゃんが、電灯もつけずただ一人ポツネンと、煙管で煙草をふかしていた。台所とつながっている次の間からもれてくる光で、その向うの布団におじいちゃんが寝ているのが見え、忽ちハナはペタンとその場に坐りこんでしまった。

女中のラクが台所から前掛けで手をふきながら出て来て「おかみさん」とだけ言うと、その場に跪いてクスンと鼻をならした。

「おじいちゃん、ハナが帰ったよ」

かなりの長い間の沈黙の末に、おばあちゃんがそう言うと、濡れタオルで顔をおおったままのおじいちゃんは、

「おお」

と、力なく答えた。

「やっぱりそうだったんですか」

訊くともなくハナがそう呟くと、おばあちゃんは黙って仏壇へ顎をしゃくってみせた。

灯明をあげた仏壇の中央に赤い紙が立てられているのが見えた。ハナは立って、おそるおそるその赤紙に手をのばした。葉書大のその紙には、乱雑なペン字ながらまぎれもなく、青山次郎と書いてあり、「右召集ヲ命セラル依テ左記日時到著地ニ参著シ……」と冷たい活字が並んでいる。野球のバットみたいな重いものでドンとミズオチを突かれたような、嘔吐に似た不快感がこみあげ、ハナは再びその場にへたりこんだ。

「ちょいとハナさん、いるの。お父ちゃんに赤紙が来ちゃったんだってえーッ」

「どうしたのよぉ、本当にこの家は……あかりもつけないで……」

口々に叫ぶようにけたたましく乾物屋と、筋向いの呉服屋のかみさんが上りこんできた。乾物屋の繁さんは次郎と同い年、呉服屋の山田さんは子供が長男の謙一と同級生で、共に十年来の往き来、そこは下町でつきあいもあけすけだった。

「本当にえらいことになったもんだね、あれっ、おじいちゃん、具合でも悪いのかえ」

山田のかみさんがのび上って電灯のスイッチを入れた。

「ここの家もまだ子供が小さいってのに大変だねえ」

繁さんちのかみさんはかたわらに積んであった座布団を勝手に引きずり出して、横坐りにドカンとその上に乗った。

「腹へったよーッ」
次男の幸二がドドドドッと階段をかけ上って来た。
「おかあちゃん、今日は勝ったぜーッ」
とジャリッパゲの目立つ丸坊主のクリクリ頭で、真黒けの顔に目ばかり光らせた幸二は、ボタンも引きちぎれて前も合わないジャンパーの裾をひるがえし、ピカピカに光らした袖で鼻汁を一つグイとこすり上げながら、ビー玉の入った罐をガチャガチャと誇らしげに振ってみせた。
追っかけるように長男の謙一が、「幸二、幸二」と叫びながら上って来て、ビー玉のうばいあいでもしているのか、二人は仔犬のようにじゃれながら、自分たちの部屋へもつれこんでいった。
「さあ、ふざけてないでお風呂へ行ってお出で。御飯はあとあと。早く早く、ほら」
子供たちを風呂屋へ追い立てるハナは、もう何時もとちっとも変っていない風だった。
どこからどう知れたのか、おばあちゃんの花札仲間や、同業の弁当屋のおやじ連中が二人、三人と集まって来て、長火鉢をかこみ出し、にわかに活気づいてきた。
駆けつけて来た町内の鳶の頭の元さんが、
「この度はどうも……若旦那がとんだこったそうで……実に何とも……おめでとうございます」
と、何だか意味不明の挨拶をして話の中に入り、歓送会の段取りから、当日、送って行く人たちの人選までドンドン話が進み、やがては、


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「通夜じゃねえんだから、しめっぽくしててもしようがねえや」
誰言うともなく酒になり、一升瓶が林立し、そこは弁当屋でお手のもの、マグロのぶつだの、かまぼこだの、卵焼きだのが並び、あっちこっち車座になって酒盛りがはじまった。茶の間からあふれ出した連中は台所の隣りのラクの部屋まで占領している。
何のことかわからず、やたらハシャギまわる子供たちの食事も、勝手知ったる他人のうち、どこの戸棚に何が入ってるかハナよりもよく知っている近所のかみさん連中が甲斐甲斐しくやってくれる。
おじいちゃんだけは、何があっても起きようとせず、ビロードをかけた布団の襟を顎まで引き上げて、濡れたタオルで顔をおおったまま動こうともしなかった。
十一時を過ぎてやっと子供たちも寝た頃、御当人の次郎が、ハーレー・ダヴィッドソンの空ぶかしを一つ高らかに鳴らして帰って来た。
飴色の皮のコートを着、帽子をわしづかみにした次郎が埃っぽい顔で、「やあ、どうもみなさん」と挨拶しながら入って来た。どうやら下で若い衆から事情の説明を受けたらしく、流石に緊張しているのか頬だけは少しひくつかせている。
一瞬、ハナと目を合わせたが、次郎はそのまま、車座に引きずりこまれた。
「よーっ大統領」「あとのことは心配ないよ」「なあに、人間一度死んだら二度は死なないよ」

みんなが口々に声をかけ、盃やコップが、次々と次郎に差し出された。
「あーあ、うちのおとうちゃん、酒は駄目なんだからいい加減にしてやってちょうだいよ」
とのハナの制止も聞かばこそ、おとうちゃんが、どんどん遠い人になって行く。
「どうでえ、今日のところはもうこのへんでお開きにしようじゃねえか」
と言う頭の一言がキッカケで、すべての人が帰り、ハナがほっと一息ついた時には、もうすでに二時をまわっていた。予想どおり次郎は酔いつぶれてすでに大いびき——。
さんざめきの後の静けさは、いっそ寂寞として空しさが一入だった。
明日も早い。
やっと床についてもハナは寝つかれなかった。
おじいちゃん、おばあちゃんの強硬な反対を押し切り、弁菊へ嫁に来て十年。毎日毎日、忙しさに追われ、幸せなんてしみじみ味わったこともなかったが、とりわけ自分が不幸とも思わなかった。子供たちも丈夫に育ち、これが世間なみの暮しかと、じっくり考えて見たこともない。今、一挙にそのつけがまわってきたのか、今までの私の生きざまは何だったのだろうと振り返ってみないわけにはいかず、ハナは暗闇の中に目をすえていた。
翌朝は何時ものように下のポンプの音で起された。調理場では相変わらず戦争騒ぎ。一斗ずつ

も入るような大釜が、三つ四つ並べられた大きなへっついにかけられ、モウモウと湯煙りが上り、クニさんが機関車の火夫のように動きまわっている。燠火のぎっしりつまった一間もありそうな魚焼の上で、串を打たれた魚がズラーッと並んでジュージュー音を立て煙を舞い上げている。その前で向う鉢巻の板前が真赤になっていて、文字通り金時の火事見舞か、薬師様の仁王像といった風情。若い衆が、五、六本を束ねたタクアンを小口から輪切りにしている。味噌汁だって作るのはバケツですくうほどの量だ。煮炊きに質の悪いコークスを使うせいか、ガスが二階まで上ってきて、建てつけの悪い建て具の間からドンドン入りこむ。ここの家では誰もが朝は頭痛持ちだ。初めて弁菊に泊った人は、翌朝は大抵二日酔いのような顔をしているものだが、おとうちゃんは、これは本当に二日酔いの頭を気遣いながら朝湯へ出かけた。

おじいちゃんは、いったん四時起きして魚市場へ出かけては行ったが、帰ってくるとまた、ラクに布団を敷かせて、顔にタオルをかぶって死んだように寝たふりをしている。

ハナは、ラクに子供たちのことを頼むと、着なれた白の富士絹のブラウスに、ツイードの上着と、共地のニッカーボッカーのズボンをはき、身づくろいも早々に家を出た。

バスで桜田門まで行って、そこから警視庁の六階の食堂まで五分ほど歩く。弁菊へ嫁に来たその翌日から、これがハナの日課だった。

食堂は百坪ほどのところで三軒の店が入っている。入口の取っつきにソバと丼物を扱う店があ

り、カレーライスにトンカツ、オムレツを商う洋食屋が続き、一番奥は、喫茶と弁当を扱う弁菊の出張店だ。客はもっぱら警視庁の職員で、いわば全員が常連だから、オール伝票で現金はごくまれだ。相手がお巡りさんだから間違いはないだろうと思うとこれが大違い。結構ズルイのがいて勘定はごまかす、とぼける、払いが悪い、なかにはまるまる踏み倒して転勤というのがいる。来たばかりの頃のハナには信じられないことだった。馴れてくるとハナは、顔を一瞥して何課の誰と見分けるのも食堂の従業員が驚くくらい早く、それを自分でも苦労に思ったことがない。毎日毎日伝票を見るせいか、筆跡まで一人一人について記憶しているので客はまず逃げられない。注文欄にだけ書いてサインのないのまですぐ誰のものか解る。それでも数が多いから伝票の整理を怠ると散逸したり、日付けがとんだりして、結局は勘定を取りっぱぐれる。サービスして「ありがとうございます」と頭を下げ金が取れないなんて、うんと損なことだと、何時も店の女の子に言うのだが、彼女たちはなかなかハナのようにはやってくれない。自分の懐が痛むようでなければ、それだけの気働きは出来ないものかもしれないと半ば諦めて、せっせと自分で励むほかはなかった。出前にサービスに洗いもの、その間に、仕込みに集金、伝票の集計、結構忙しく坐る間もない。初めのうちは一日中立っている、ただそのことだけでガックリと参ってしまったものだった。

やたらと忙しくはあっても、長年とりくんで馴れ切った作業であってみれば、ハナの不安や悲

しみが取り紛れて消えてしまうわけでもなく、なればこそ胸の底に澱んだ不快感が時折、ダボンと音を立てて揺れかえり、背筋を風がぬける。その日もミスこそしないが、心ここにあらずで、そこは以心伝心というか心憎いまでこちらの心のありようを気取る人がいて、「どうかしたの、おばさん元気ないよ」と声をかけて行く。

明後日の朝にはもうおとうちゃんは入隊して、このあたしは「出征兵士の妻」「銃後の婦人」、新聞の見出しや、雑誌の広告ではよく見る言葉だが、まさか我が身のことになろうとは露知るよしもなく、ひたすら他人事と深く考えたこともなかった。まかり間違えばおとうちゃんは名誉の戦死、靖国の英霊となって、おのれは戦争未亡人。未亡人とか後家って言葉も縁遠く自分にあてはめてみたことさえさらさらない。そんなことを考えると、ワーッと大声出したい衝動が身内に湧き立って、とうとう辛抱たまらず、店の忙しさが一段落ついた時、

「ナミちゃん、あたし帰るからあといつものように頼むよ」

唐突な言い方に店の子たちは戸惑うかと思いきや、むしろ待ちうけていたように、早退けをすすめてくれた。

「こっちはいいですよ、安心して下さい。みんなでちゃんとやっときます」

「何でしたら、明日は休んでも大丈夫ですよ」

結構、気を遣ってくれていたのだ、と二人の心根に感謝して、つい涙がこぼれそうになった。

「明日の晩、お宅へ行きます、旦那に渡したいものもありますし……」
お守りでも持って来てくれるつもりなのだろうか、もうこの子たちのことを気がきかないなんて言うまい、とハナは思った。
男五人、女の子が四人もいる、みんな手なれた連中で、まずここはこのままかせて大事ない。それぞれに言葉をかけるのももどかしく、ハナは警視庁を飛び出した。

帰れば弁菊は何時ものとおりで外目には何の変りもない。弁菊と金で大書した緑色の配達用の箱車がズラーッと道端に並び、せわしげに立ち働く店のものたちが見える。
ロクちゃんが四斗樽のふちにゴム長で立ち上り、六尺丸太をぶっ違えにして下に五寸ほどの巾の板を打ちつけた芋洗い棒を樽の中にねじこんで、舟でも漕ぐようにして芋を洗っている。ロクちゃんと言ったって本名は他の若い者も知りやしない。ハナも無論、知らない。五郎だか悟一だか、本来ならばゴーちゃんの筈が、前からゴーちゃんというのが一人いる、お前、あとから来たんだからロクちゃんにおなり、といった実にいい加減な命名で、弁菊へ来たその日から足かけ六年、ロクちゃんはロクちゃんだ。他の若い衆にしてからが、本町方面を配達して歩くから「本町」、出身が越後だから「エチゴ」、暮れの餅つきの時に助っ人に来て、そのまま居ついてるというんで「助さん」、どれもこれもそれなりに曰くはあるが、ほかじゃ通らない。出先で事故でも


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com